

に安然に関する多くの論文があるので、安然の教学についての
公刊が待ち望まれる。

（龍谷大学教授）

末木恭彦著

『徂徠と崑崙』

（春風社・二〇一六年）

山本 嘉孝

一 本書の特色と構成

本書は、近世日本を代表する儒者の一人である荻生徂徠とその門人の山井崑崙について、著者が一九八二～九二年の十年間に発表した論文九篇を合計八章に収める。特に大幅な修正・加筆はない。本書の出版は「偶然」（あとがき）であったとのことだが、初出論文がこのような形で一冊にまとめられた意義は大きい。本書の最大の特長は、敢えて抽象的な言い方をすれば、全てを徂徠の色で染めてしまわない徂徠学研究となっている点である。

著者は意識的に、徂徠の経書読解を朱子学摂取の過程として捉えなおしている。これは、徂徠の時代から現在に至るまで、徂徠の学問が専ら朱子学の否定としてばかり取り沙汰されてきていることに対する疑念に基づいており、大変貴重な視点である。また崑崙については、徂徠学の単なる継承者として見做すのではなく、自身の意志と判断によつて「古」への接近を企

てた一個の学者として扱っている。要するに、「徂徠学派」や「蔵園派」などとして一括りにされやすい学芸の一潮流の中に、様々な異質な要素がそれぞれ必然性をもって折り重なり併存していた実態が、具体的に解き明かされているのである。

徂徠の独自性をどのように理解し、位置づけるかは大きな問題である。徂徠はその強烈な個性と主張のゆえ、全く独自の説を唱え、莫大な影響を及ぼした存在として、褒貶問わず、過剰なほどの評価を受けがちである。本書は、「徂徠の評価には立ち入らない」（まえがき）と断った上で、徂徠の独自性や影響力を十分に認めつつも、その独自の学説には論敵である朱熹の学問に連続ないし近似する側面があり、その影響力も個々の受け手の意志や状況によって限定され得るものであったことを指摘する。一見、奇を衒った視座であるかのように思われるかもしれない。しかし実際はその逆で、本書の著者は、徂徠と崑崙の目線に絶えず寄り添い、参照されたであろう文献、展開されたであろう思考を丹念に辿っていくという、堅実な研究方法をしつかりと守っている。

本書が主要な分析対象とするのは、徂徠の『論語徴』と崑崙の『七経孟子考文』である。いずれも兩人による経書読解の具体的な形跡が残された資料で、書名はよく知られていながら、中身の詳細な検討が立ち遅れていた著述である。徂徠の『辨道』『辨名』も頻繁に参照されるが、焦点は常に『論語徴』に当てられている。著者の立場は、徂徠の経書読解法は六経では

なく『論語』の読みを基盤として培われた、というものである。したがって、本書における『論語徴』研究は、徂徠の『論語』理解にとどまらず、徂徠の古代観や古代像がいかに生成されたかという、遠大な問いまでを射程に入れている。また崑崙を論ずる章は、『論語徴』研究と直接には連関しないものの、本書の内部において、徂徠と崑崙の経書読解法の比較を可能にしている。

左に本書の構成を示す。徂徠『論語徴』は全五章（第一・二・三・六・八）、崑崙『七経孟子考文』は全三章（第四・五・七）で取り上げられる。徂徠と崑崙の章が入り混じる配列となっている。

まえがき

1 荻生徂徠の論語観

2 荻生徂徠の聖人観——孔子聖人考

3 荻生徂徠の「学」解釈

4 『七経孟子考文』攷

5 山井崑崙の尚古思想

6 荻生徂徠の漢字認識

7 『七経孟子考文』凡例の考察

8 『論語徴』の君子像

あとがき

二 各章の内容

以下、簡略ながら各章の内容を紹介する。

第一章では、朱熹までの『論語』注釈四種（『集解』『義疏』『注疏』『集注』）を比較対象として、『論語微』冒頭にある『論語』の位置づけと成立に関する徂徠の記述が論じられる。徂徠は、儒学の基礎的な書物を『論語』ではなく六経とすることで、自覚的に朱熹に異論を唱えた。しかし『論語』を孔子の「語」と見做し、人名の称し方によって『論語』の編纂者を特定する手法は朱熹と連続する。更に『辨道』にも、宋儒との連続を徂徠が自ら認める記述がある。それでも徂徠が自説の特異性を強調したのは、朱子学に強い魅力を感じて修得しようとしたが、理解できない部分が残り、「劣等感」を抱いたため、と著者は推測している。なお著者は徂徠による仁斎批判を朱熹批判に同化されたものとして見做しており、仁斎の『論語古義』は取り立てて考察されない。

第二章は、徂徠が孔子を聖人として見做さなかったとの通説（『辨名』）に疑義を呈する。『論語微』志学章に拠ると、孔子は「最も典型的に常人の歩む道を行んだ」（六五頁）点で、常人とは異なる聖人として位置づけられている。また孔子を常人に連なる聖人として捉える徂徠の思考は朱子学に接近するものである。但し、同じ朱子学でも特に『論語集注』への接近であって、聖人を常人とは隔絶した存在として扱う『論語或問』や『論語

大全』への接近ではない。因みに『經子史要覽』に拠れば、徂徠にとって「宋儒」とは、特に『集注』と『大全』を指した。

第三章は、「学」が朱子学（『大学章句』）や仁斎（『論語古義』）においては一生かけて取り組まれるべき無限の営為とされるのに対し、徂徠の『論語微』学而章・志学章では、政治に参与するための学びとされ、且つ十五〜三十歳の期間に取り組まれる営為に限定されていることを指摘する。しかし徂徠自身の学問は、このような限定の対象外となっており、むしろ無限を志向するものであった。また『論語微』のいう「学」の具体的な内容、すなわち先王の道も、朱子学における「学」が目指すところの無限や真理に近い。畢竟、徂徠が追究したのは無限なる学だったが、それに接近していくための確かな方策として、限定的な「学」が構想された、と著者は考えている。

第四章は、崑崙『七経孟子考文』の成立事情を考察した実証的な論考である。本章で取り上げられる主要な資料は、崑崙による書き入れのある明版『十三経註疏』（閩版、嘉靖年間刊、京都大学人文科学研究所蔵）である。そこには校勘の進捗状況が日ごとに記されている。結論としては、崑崙が足利学校に赴いたのは、必ずしも師徂徠の指示によったのではなく、崑崙が自分の意志で明版の磨滅箇所を宋版『五経正義』で補うことを企図したためであった。『七経孟子考文』で重視される古写本の存在は、当初、徂徠も崑崙も認識しておらず、崑崙が足利に行つて初めて知るところとなった。また『七経孟子考文』は、崑崙

の足利滞在を許可した伊予西条藩主のために、崑崙個人の研究成果報告書として著された。

第五章は、崑崙『七経孟子考文』に登場する「古式」「古観」の語が書物の形態を指し、徂徠のいう「古」とは一致しないことを指摘する。崑崙が徂徠への入門を志したのは、その時期から類推して、徂徠が朱子学者であったところに著した『訳文筌蹄』の写本で考究される「訳」（訓読によらず日常語に正確に翻訳しながら文言を読む方法）に共鳴したからで、崑崙は初めから徂徠晩年の古文辞学を吸収したのではなかった。崑崙の尚古思想は、当然徂徠の影響を受けながらも、徂徠のそれとは異なる形で発展を遂げ、結実したのである。

第六章では、再び徂徠の『論語徴』に戻り、「子」「学」「説（悦）」の字を徂徠がどのように認識したかが検討される。個別の漢字ごとに、置き換えのきかない固有の意味があるとの考えは、既に『訳文筌蹄』の段階で成立していたが、『論語徴』では更に一歩進み、一字が特定の脈絡・場面を指示するとの考えが貫かれている。しかしここで著者が行う重要な指摘は、徂徠によるそのような古文辞の読みには自ずと限界があり、その限界を乗り越える上で、徂徠は自身の「古代像」を字義の解釈に持ち込んだ、との点である。徂徠が古文辞の用例を列挙したのは、単なる字義の帰納のためではなく、むしろ自説の補強のためであった。したがって徂徠の古文辞学には、客観的要素と主観的要素が不可分な形で混在している。

第七章では、崑崙『七経孟子考文』を読むための基礎作業として、同書の凡例の読解を出発点に、校勘の結果がどのように整理・記述されたのか、例えば囲み字の用法や出典の表示方法について、豊富な事例とともに解説されている。中には凡例では取り上げられない事例も拾われており（一二二頁）、有益である。校勘に用いられた諸本についても説明が加えられる。崑崙は本文・文字の確定だけでなく、書物の本来の形態にも斉しく関心を払った。

第八章は、徂徠『論語徴』における「君子」の定義の検討を通して、徂徠の『論語』理解には六経理解が作用しておらず、むしろ六経理解の基礎に『論語』の読みがはたらいっていることを指摘する。六経を中心に「君子」を定義するのならば、「在上」と「成徳」のみで事足りるはずだが、『論語徴』で徂徠は君子の必須条件に「知命」を付け加えた。『辨道』『辨名』で示されるような六経理解が『論語徴』の前提となっているとの通説は、少なくとも「君子」定義においては当たらない。徂徠にとって、『論語』は必ずしも六経の下位に置かれるのではなく、むしろ六経と対等に並ぶ書物であった。『論語』を重視する姿勢においては、反朱熹・反仁斎の姿勢を前面に打ち出す『論語徴』も、依然として朱子学・仁斎学の強い影響下にあった。

三 全体の議論と今後の展望

本書の主眼は、やはり朱子学と徂徠学との関係を、断絶より

も連続の方向から捉える点にある。著者は中国哲学の分野で、朱子学に関する優れた研究成果を挙げられており、宋代における朱子学と道教の関連を実証的に検証し、また明代以後、科挙の教科書として用いられた『論語大全』における解釈の振れ幅を明らかにするなど、朱子学そのものの重層性や多面性に光を当てる内容となっている。本書の主題は徂徠と崑崙であるが、朱子学に反旗を翻した徂徠が、朱子学を単に否定するだけでなく、自身の学術の基盤としてひそかに活用し続けたことの一端が明らかにされることで、むしろ朱子学の奥深さ、幅広さが煌々と照射されている。

徂徠が朱子学を修めようとして、挫折したのではないかとの推測（第一章）も、著者自身、仮説の域を出ないと断るが、蓋然性は皆無ではなからう。王陽明や仁斎も朱子学の修得に挫折した。そもそも朱子学は容易に身につけられる学問ではない。本書の論を敷衍すれば、概して朱子学批判には、朱子学を完全には体得できないまま、朱子学との格闘を継続する過程において、朱子学に改良を加え、いわば朱子学の発展型を創造していく側面が存在する、といえよう。本書は、徂徠の学問をそのような枠組みの中で捉えなおしている。

また本書が、崑崙の校勘事業と尚古思想の淵源を、徂徠晩年の古文辞学定論ではなく、むしろ朱子学者時代の徂徠の言語研究に見出すところも、徂徠・崑崙の時代の朱子学が、必ずしも観念的思惟ばかりに終始することなく、校勘や言語習得といっ

た実践的な営為とも接続し得る学術として学ばれていた可能性を提示する。日本における考証学の始まりと展開という非常に大きな問題を考える上でも、本書の崑崙研究は示唆に富む議論を含んでいる。

本書では各章を通して、著者自らが自身の論をしばしば「仮説」、または稀に「飛躍」として限定する。これは著者の真摯な研究態度の表れ以外の何ものでもないが、確かに本書は、揺るぎない定説の集合体としてよりも、魅力的な仮説の宝庫として読まれるべきであろう。中には将来、否定される説もあるかもしれないが、現段階ではまず検証を重ねることが必須である。朱子学と徂徠学の連続性、また徂徠の六経理解が『論語』読解を基盤にしている、などの論は、著者自身が指摘するように、まだ仮説の段階にある。壮大な論であるから、簡単には立証が完結しないことが予想され、今後、複数の研究者によつて様々な角度から検討が加えられていくことが期待される。

特に、朱子学者時代の徂徠に関しては、大庭卓也氏「荻生徂徠『護園隨筆』の反響」〔『文献探究』第四十号、二〇〇二年〕などの重要な先行研究の成果も踏まえながら、やはり『護園隨筆』の読解を中心に、今後、詳細に検討される必要がある。同時に、徂徠が生きた時代の日本における朱子学の実態についても研究が深化されなければならない。岩橋遵成『徂徠研究』（関書院、一九三四年）では、服部南郭の言にしたがい、木下順庵が「古学派の祖」と称されている（二六頁）。確かに木門で

は、朱子学を基調としながらも、仁斎や徂徠とも響き合うところのある、多彩な学問や文芸が盛んであったが、その内実はまだ解明の余地がある。そもそも徂徠が摂取した朱子学が、果たして現在の我々が想像するほど《純正》なものであったかについても、あらためて精査が俟たれる。

なお本書に収められた論考の初出時期は二、三十年前であり、当時から現在までの研究の蓄積について筆者は特に加筆を行っていないため、読者が適宜補うなどの注意が必要である。しかし、年月が経っても、著者の視点は新鮮なままであり、決して古色を帯びていない。

最後に一言付け加えるとすれば、本書はどちらかといえば玄人向けの研究書である。記述はあたかも数式のごとく極限まで論理的であり、論の進め方は非常に慎重であると同時に、時折大胆でもある。初学者や専門外の読者が気軽に読める本ではない。しかしこれは本書の汚点とはならない。むしろ逆で、一般読者に諂うことなく、研究という営為の難解さ、複雑さを無理に包み隠そうとはしない、本書のような専門書こそ、学問の水準を引き上げ、学界に豊富な栄養を供給する。本書が取り上げる徂徠の『論語微』や崑崙の『七経孟子考文』もまた正にそのような著述でなかったか。

（大阪大学専任講師）

高山大毅著

『近世日本の「礼楽」と「修辞」』 —— 获生徂徠以後の「接人」の制度構想 ——

（東京大学出版会・二〇一六年）

片岡 龍

編集委員会から本書の書評を依頼されたとき、ここしばらく获生徂徠研究から離れているし、本書の主関心である徂徠没後の徂徠学の影響や波及の実態についてもあまり勉強していないので、それらに詳しい人との共同書評の形にできないかと相談してみたが、案の定却下された。

却下の理由も筋がとおっており、もはや辞退もできず、あきらめてワープロに向かってはみたものの、予想どおり自分にはまともな書評をする資格のないことに、いよいよ後悔が募るばかりである。

本書は「第五回東京大学南原繁記念出版賞」受賞によって品質保証されている。また、書評会も開かれている（二〇一六年八月の徂徠研究会）。いずれまともな書評はかならず出よう。高山さんはじめ読者には申し訳ないが、この書評は、本書をダシに自分の思いを語るようなものではない。ただ、高山さんはじめ若い読者の顔を思い浮かべながら、真摯に語りかけるつもりで書いた。憎まれ口は性癖ゆえと、お許しただければ幸いです。